

「の夏、山形と秋田の県境にある鳥海山に行つた。登山の前後は、酒田のビジネスホテルに宿泊した。さすがに東北となると、移動してすぐの登山というわけにはいかなかった。松江から酒田まで千キロを超える。早朝から三交代で運転し、高速道路を乗り継いで到着したのが夕刻だった。途中新潟と山形の境で高速道が途切れるため国道をしばらく走った。家、バス停、町工場、店、にわか道に道の両側が人臭くなり、無機質な高速道に退屈していた気分が紛れた。左に日本海を見ながら北上していくのだから、これはカブで走っているはずだと気づく。何やら見覚えがあるような気がしてくるのだが、海端の町はどこもよく似ているので、確かな記憶ではない。でも、それにひきずられて思い出すこともある。

「はい、これ。」

バイト先の寿司屋で板前さんから渡されたのは、ビニール袋にとっさりが入った百円玉だった。両手で包むようにして持ちながら、腑に落ちないでいる、ぼくを見て取ると、

「餞別だよ、餞別。百円玉だったら使いにくいだろう。この方が無駄遣いせんわと思つてな。」

まかないのおばさんが笑いながら言った。

「そげん、自販機でなんぼでも使えーがね。」

「あつ、そげか。そら、考えんだったわ。」
北海道にバイクで行くとは言つていたが餞別をもらえるとは思ひもよらず、そもそも旅に出る者に金をくれること自体新鮮だった。うれしかった。

どっさりの百円玉は、自販機ではそれほど消えなかったが、国道沿いの公衆電話ボックスで重宝した。一日に一度は、家族か友人にかけた。

一度、浪人中のKにかけた。今どこにいるかと聞いたので、「大雪山だ」と答えた。ずっと後、Kはバックパッカーとなって世界を回った。帰国したときに会ったら、

「お前の大雪山の一言で、世界に行くこと決めた。」
と言った。

旅も後半になると百円玉も乏しくなり、電話をするのが面倒にもなつて、ずっとかけないでいた。母が倒れるほど心配していたのを知ったのは、帰宅したときだった。

四十八年後の国道は、それほど変わっていないように思える。ただ、電話ボックスはことごとく消え、多くのポケットの中には携帯電話がある。旅する者が心配することもさせることもなくなった。それは、進歩であるには違いない。でも、何だか高速道路にも似てどこか殺風景だ。



3 木幡智恵美 (その2) 63 木幡智恵美

木幡智恵美

コロナ禍の中で (2)

学校が再開し、二男も平常通りの仕事に戻った。新型コロナウイルスの感染が広がっている神戸から、同じく感染者が多い神奈川県に転勤になった長男。コロナ感染拡大による緊急事態宣言が発令され、帰省できないまま転勤先に赴き、見知らぬ土地で過ごしている。救いは、割と近い場所に神戸の事務所が一番親しくしていた先輩が勤めていること。そこにヘルプに行くこともあるようだ。富士山にも慰められながら、何とかやっていけるとのこと、少し安心する。娘は育児休暇中だから、新型コロナウイルス感染者受け入れ病院である職場に行くことはない。必要な書類を届ける時などは、嚴重にマスクをした本人だけが建物に入り、宗矢は付き添いの私と一緒に車の中で待つようにしている。寛大と実歩を保育所に通わせながら、宗矢と二人家で過ごし、たまに我が家に来るといふ日々だ。夫には、帰ってくる度に飲みに行く友人から電話があつたというが、断つてもらつた。東京の近くに住んでいる人だ。百歳になる義母にうつりでもしたらえらいことだ。家族だけでない。週に二〜三度やってくる孫たちを安全な状態にしておかねばならぬ。

そうした中、義母の様子が少しずつおかしくなつてきていた。これまで、どちらかといえば暑がりだったのが、ここ数年、やけに寒がりになつてきている。言つてもすぐ忘れ、何度も聞き返すし、随分昔に処分したものを出してくれと何度も言う。「智恵美さん、来て。ほら、あそこから誰かが覗いちよう」「これ、私のじゃない。お化けが持つてきたかな」など妄想めいたことも。足腰も弱り、風呂で滑つたのを機に、介護認定を受け、デイサービスに通うようになった。最初に受けた四年前の認定では要支援二、次の年には要介護一、その翌年には要介護二になった。次は三年後に認定をされると言われたから二年経過しているが、明らかに介護度が進んでいるように思う。一年前にインフルエンザで入院し、がたつと身体能力も認知面も落ちた。圧迫骨折をするたびに歩行も難しくなり、今はほぼ車椅子だ。五月も終わろうとしているのに、炬燵をしたままだし、「わけが分からん」を連発する。

30代フリーター やあ、ジイさん。脱炭素に取り組む企業に融資する金融機関に対し、日銀が資金を長期にわたって金利ゼロで貸し出すことにした、と報じられている（7月17日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 現在の資本主義が脱炭素を有力な利潤の源泉にしようとしていることを示す動きのひとつだ。

これに対しては「やや慎重さを欠いているのではないか」と話す日銀幹部もいる、と記事は伝えている。政府の役割である気候変動対策にまで手を出すのは、物価と金融システムの安定という日銀の本来の使命からの逸脱ではないか、という疑問の表明だ。言い換えれば、日銀は市場原理の安定的な作動を制御するのが役割なのに、気候変動対策という市場原理の外の課題を抱え込むのは、市場を乱すことにつながるのではないかという疑問と言ってもいい。

それでも「気候変動は中長期的に経済・物価・金融情勢にきわめて大きな影響を及ぼす」として今回の政策決定

に至った、と記事は報じている。

30代 無理な理屈づけにも聞こえる。年金 これまでなら、市場原理に反するとして市場への持ち込みが制限されていたことも、市場に積極的に入り込んで、新しい段階の市場法則のシステムを形成する方向に資本主義が向かっていることを示していると受け取ることは可能だ。

市場原理に反する代表的なものは国家原理だ。前者が自由な競争を前提としているのに対して、後者は平等な分配を建前とする。前者を従来のまま貫こうとする限り、コストのかかる脱炭素は実現不可能と言っている。実現しようとすれば、国家原理にもとづく富の再分配によつてそのコストを負担するほかない。いま世界の諸国家はそれを逃れられなくなっている。政治的な機運がそれを強いているからだ。

資本主義はそこに目をつけた。先進国を中心としたゼロ金利、マイナス金利が示すように利潤の源泉の縮小を余儀なくされている現在の資本主義は、

脱炭素のための国家による富の再分配を新たな利潤の源泉に加えることをもくろみだした。

ゼロ金利、マイナス金利がその再分配を支える。国家はいくら借金をしても、財政インフレを招く恐れがない限り、脱炭素のコストを負担することができる。つまり企業の脱炭素の取り組みに補助金を出すことができる。企業にとつてはそれが利潤の源泉となる。

30代 それは自由競争の過程にそれを妨げる要素を介在させることになる。年金 柄谷行人は歴史を、支配的な交換様式の変遷とみなし、互酬による交換様式A、略取と再分配による交換様式B、商品交換による交換様式Cの順に、支配的な交換様式が移り変わってきたと考えた。さらに、Aが支配的だった時代よりさらに前の時代、すなわち定住社会ができる前の遊動的な狩猟採集の時代に支配的だった交換様式として共同寄託を想定している。

脱炭素への政府の補助金を利潤の源泉とするということは、Cの様式にB

を組み込むことであり、歴史を部分的にせよ後退させることを意味する。いま資本主義は脱炭素に限らず、諸場面で同様の後退の動きを見せている。Bへの後退だけでなく、Aへの、そして共同寄託への部分的な後退だ。

たとえばクラウドファンディングはAへの後退であり、贈与の復活と理解することができる。「寄付型」「投資型」「購入型」の3つに大別されるクラウドファンディングのタイプのうち「寄付型」がそれに相当する。

モノやサービスを共有して利用するシェアリングエコノミーは共同寄託への後退と考えることができる。柄谷は交換様式A、B、Cのほかに、歴史上は存在したことがない交換様式Dを想定し、それを共同寄託の高次元での回復と考えている。現在のシェアリングエコノミーはDそのものではないが、Dの模型とみなすことができる。

いずれも過去の時代に支配的だった交換様式への部分的な後退である以上、それらは資本主義の部分的な自己

否定と言える。

30代 米民主党左派の下院議員アレクサンドリア・オカシオ・コルテスらは脱炭素とMMT（現代貨幣理論）を直結させた政策を主張している。温暖化と格差に対処するため、財政赤字の拡

ニュース日記 795
中村 礼治

「自己否定」で延命をはかる資本主義

大を唱える「グリーン・ニューディール」だ。電力の100%再生可能エネルギー化や労働者の最低賃金保障を、富裕層への課税強化のほか政府の借金

でまかなうことを主張している。年金 MMTは、財源を確保するには通貨を発行しさえすればいいという理論なので、まるで打ち出の小槌のような主張に聞こえる。だが、無から有を生むことができるかと主張しているわけではない。そう見えるのは、貨幣をモノやサービスのような実体のある富とみなすからだ。

MMTは貨幣を富ではなく、富を流通させる手段に過ぎないと考える。だから、富がなければ、政府がいくら貨幣を発行しても、言い換えれば、いくら借金をしても、富が社会に行き渡ることにはない。つまり、富の稀少性の縮減が現在ほど進んでいなかった時代には、この理論はリアリティーを持たず、異端の学説にとどまっていた。だが、資本主義の高度化とテクノロジの発達が変わった。